

87企画-4 グループ展

part 1 5月1日(金)ー5月17日(日) (月曜休廊)
大城 信吉 大浜 用光 永津 禎三
丸山 映 山内 盛博
part 2 5月19日(火)ー6月4日(木) (月曜休廊)
伊江 隆人 大嶺 實清 奥田 実
照屋 禮子

GALLERY TAKUMI

part 1



Y. Ohama



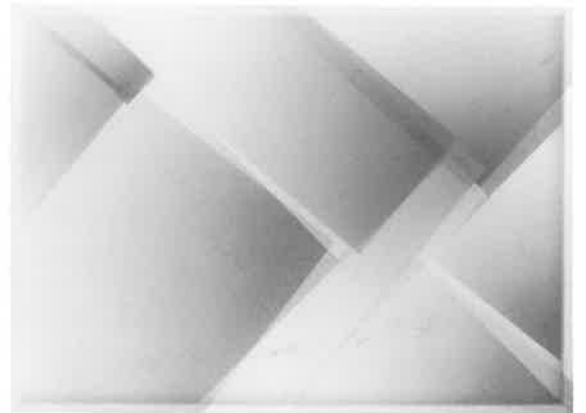
T. Nagatsu



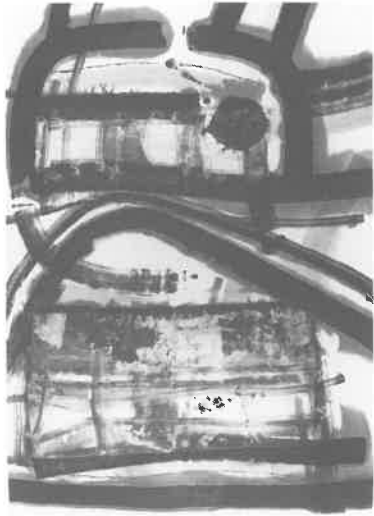
S. Oshiro



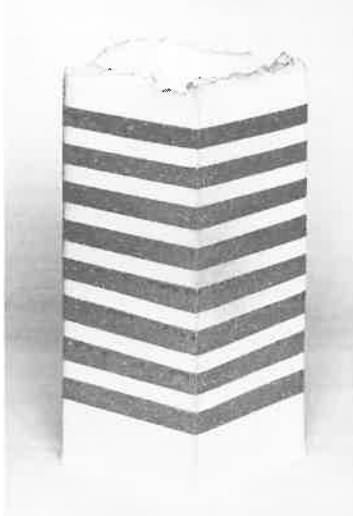
E. Maruyama



M. Yamauchi



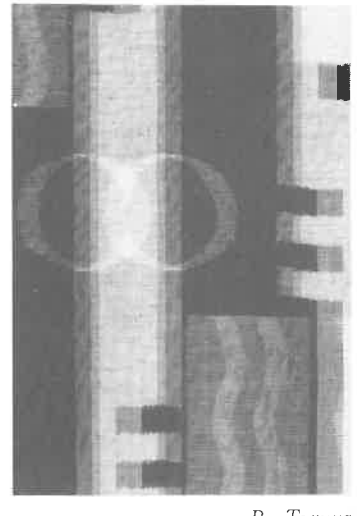
R. Ie



J. Omine



M. Okuda



R. Teruya

「開かれた実験的空間」の実現に向けて

翁長 直樹

「実験画廊」—これが「匠」の開廊にあたっての方向づけであったし、今でもその方針は変わってはいまい。一年を経て、この空間がどれだけその機能を果たしてきたか、考えてみたい。

画廊の存在価値は作家が自らの仕事を、ある程度まとまった形で見てもらえる点にある。公募展や団体展のように、ある意味で出自を切り離され、その一点のみが羅列されるのは決して作家にとって本意とは言えないであろう。

美術館はいざ知らず企画画廊もほとんどない沖縄では、公募展が大きな力を持つのは当然であるが、その中で作品に序列をつけることに無自覚になってしまい、むしろ「商品」の価値ヒエラルキーを作り出す結果になっている。勿論「商品」というのは喩えではあるが、美術館の出現そのものが作品のあるべき基盤を切り離し、「死んだ」状態で見せることであったのを考えれば、公共の美術館にも期待はさほどできそうもない（と言って何も無い状態では美術館の制度も見えないのであるが）。そこで画廊や作家が主体的に関われる展示空間が問われてくる。画廊の役割は企画を通して作家により自在に語らせることにある。作家はそれに答えるべく、既成

の展示のあり方に縛られず、より先鋭的で実験的な作品を作ることが可能となる。そのような画廊空間と作家の理想的な出会い、観る側のスリリングな出会いがあってはじめて既成の枠組を超えた、より開かれた画廊となるのである。

そのように「開かれた実験的な画廊」を目ざした「匠」ではあったが、一年をふり返ってみると、十分にその機能を果たしたとは言いがたい。確かに様々な困難に拘らず当初の企画が続けられたこと、とにもかくにも、すべての企画にパンフレットを発行し続けたこと、力のこもった、充実した展示が少なくなかった、にしてもである。サロン化した「地方の美術」を超える画廊より以上のものができたのか、残念ながらはなはだ疑問ではある。このことは作家の責任ではなく、画廊空間の「場」の構築の問題だと言えよう。財政を会費に頼っている現状では思い切った企画ができなかったこともあるが、あえて言えば、すべての会員の中に既成の画廊を超えるはっきりしたビジョンが見出せなかったことがその主な因であろう。

さて、「匠」もいよいよ二年目に突入する。昨今の情報の急激な発達の中では従来の「地方」対「中央」の概念に収まり切れない変化が我々の内部に起りつつあり、画廊も、「地方」を突き抜けた、独自の「場」を構築せねばなるまい。日本各地の自主画廊や孤軍奮闘している作家グループとのネットワークづくり、ワークショップ、学習会等、二年目は「実験的、開かれた画廊」実現のためにやるべきことは多い。